

5 ミニトマト新系統「C7-276」の特性調査

試験の目的

基幹品種である「SC6-008」は従前から異形株^{*}が多いことが問題となっていますが、この課題を解消したとされる良食味新系統「C7-276」が開発されたため、現行基幹品種との比較試験を行い、当地への導入の可能性を検討しました。

※異形株は、果房の未発達、芯止まりなどの症状を起こし収量低下を招くことから、定植時までに見分ける必要があります。その判別には明確な定義はありませんが、産地で判別している基準である「節間が短く側枝が強い」、「葉色が濃い」、「葉枚数が多い」などの症状を有する株をいいます。

関係先

旭川青果物生産出荷協議会 ミニトマト部会(以下「部会」)

供試品種及び栽培経過

品種名	種苗会社	播種日 [*]	定植日	収穫開始	調査終了
SC6-008 (基幹品種)	サカタのタネ	3月11日	5月7日	7月1日	10月7日
C7-276					

^{*} 播種は200穴セルトレイ、鉢上げは13.5cm透明ポリポットを使用しました。

耕種概要

- (1) 作型：雨よけハウス栽培
- (2) 栽植密度等：床幅90cm，2条植え(株間45cm)，主枝1本仕立て，250株/a，
2反復，ダークグリーンマルチ使用
- (3) 規格等：部会出荷基準に準拠

評価基準

生育調査(発芽，開花，果房形，草丈，異形株の発生程度)，収量調査(収穫量，規格別果数割合)，品質調査(外観形質，Brix)，日持ち性について評価を行いました。

主な試験結果

- (1) 異形株の発生程度

ア 調査結果

当センターで育苗した苗全てについて異形症状の発生程度を調査しましたが、両品種ともに異形株と思われる株は確認されませんでした。

(調査株数 SC6-008：171株，C7-276：84株)

イ 考察



本試験条件では異形株が発生しなかったため、当該特性の比較には至りませんでした。販売元から「SC6-008」は育苗時に一定期間低温にあたると異形株になりやすいとの情報があることから、育苗時のやや高めの温度管理^{*}が異形化を回避できた一つの要因と推測されます。このことから、育苗中はできるだけ低温環境にせず、温度変化によるストレスを与えないことが重要であると考えられました。

※育苗管理：①播種から4/22まで温室(最低室温15℃設定)で育苗。ただし、発芽まではシルバーの遮光資材で被覆したトンネル内において28℃設定のマットヒータ上で発芽。
②4/23から定植日まで育苗ハウス(最低室温10℃設定)で育苗。

(2) 生育・収量調査結果

ア 調査結果のまとめ (表)

表 調査結果のまとめ

	SC6-008	C7-276	コメント
外観品質			<ul style="list-style-type: none"> ・果形, 果色は近似している ・果皮の光沢(ツヤ)は「C7-276」が弱く, その差は明確である
果房形 (W果房以上の割合) (%)	50	64	多収が期待される複数果房の割合は「C7-276」が14%高い
総収量 (kg/a)	911	974	「C7-276」が多収
良果収量 (kg/a)	721	786	「C7-276」が約9%多い
良果収量割合 (%)	79	81	互いに80%程度でほぼ同等
良果1果重 (g)	13.4	12.6	「C7-276」がやや小果傾向
糖度(Brix) (%) ※5回平均	8.2	9.2	「C7-276」が高く, 8月中旬以降は常時9%以上を計測

イ 規格別果数割合 (図)

- ・良果 (2L, L, M, S の合計) の割合は, いずれの品種も 80%以上でした。
- ・各規格の割合は, 「SC6-008」が 2L, L, M 規格が 25%程度とほぼ同等であるのに対し, 「C7-276」は 2L 規格が少なく, M 規格が多い結果となりました。
- ・不良果については, 裂果と大果の割合が多くなりました。特に大果は 7 月に多く, 裂果は 9 月以降に多くなる傾向が見られました。

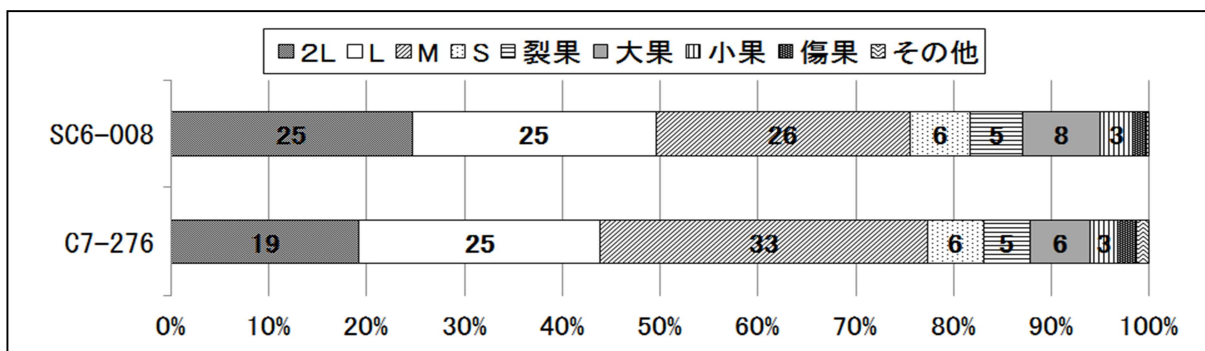


図 規格別果数割合 (%)

当地での栽培適正について

「C7-276」は総収量, 良果収量ともに多収であり, 品質面においても, 糖度が高く, 萎びにもやや強い傾向が見られるなど, 「SC6-008」よりも優れた特性があることが確認できました。しかし, 果皮の光沢については, 「SC6-008」に見劣りするほど外観の違いが明確であったことから, 導入に関しては市場側の評価を事前に確認する必要がありますが, 評価によっては部会の基幹品種になり得る有望な品種といえます。